

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 48 号	2005年7月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠
---------------------------	-------------------	--

1. 活動報告（事務局 記）

- 7月3日（日）本日は度重なる大雨の中13名の参加を得まして手押し除草機を使っての田んぼの除草と、抜いたがまの穂の片づけをして頂きました。びしょ濡れになりながらの活動本当に感謝いたします。一般的な農業では田植え時除草剤を散布するのですが当会の方針にて「限りなく無農薬にて水を汚染させない」であるため今後も手取り除草が重なると思います。
- 7月8日（金）中国電力宇部電力所のボランティア活動として須賀河内川のヨシの刈取りと片付け作業をして頂きました。午前17名、午後20名でやって頂き、とてもきれいになりました。
会からは今井会長、吉富匡一郎・西原会員が参加されました。
- 7月16日（土）今日の作業は、先日中電のボランティアにて刈ってもらったヨシの切断と整理（堆肥用）と観察路の草刈でした。暑い中14名の会員で作業してもらいました。
- 7月16日（土）今日の観察は魚と水生昆虫でした。ビオトープと側の川に入って、網・釣り・投網・仕掛け（セルビンなど）を使っていろんな生き物を捕まえて観察し、最後に逃がしてやりました。隊員23名、保護者19名、スタッフ14名で賑やかに楽しく、暑い時の水辺は最高の気分でした。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎ 見学者

- 8月11日 宇部市環境共生課主催例年の「水辺の教室」があります。案内担当募集します。

◎ 行事

- 8月7日（第一日曜日）の活動 作業(草刈りほか)
- 8月20日（第三土曜日）の活動 午前：作業(蕎麦播種)
午後：里山自然観察隊

3. ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝

コナギとミズアオイ

コナギとミズアオイは、両方とも水田に生えるミズアオイ科の1年生草本です。除草剤ができる前は、特にコナギは強害草として米作りの敵でした。除草剤によってほとんどの水田では駆逐されてしまいましたが、農薬を使わないビオトープの水田のような場所では、今もこの草を取ることが夏の主たる労働となっています。このコナギ、田植え後に一斉に発芽し、田面一面をびっしり蔽い尽くすほどはびこりますから、もしほっておけば米の収量は半分～1/3になるといいます。合鴨農法は、コナギの発芽を抑える目的で、水を濁らせておくために合鴨を使います。米ぬかを振ったり、緑肥を鋤き込むやり方も、有機酸を発生させてコナギの発芽を抑制するのが目的です。除草剤を使わない米作りがいかにも大変であるかがよくわかります。水田に似たような環境のビオトープの湿地も、夏には一面コナギになってしまうので、毎年コナギの除草が欠かせません。

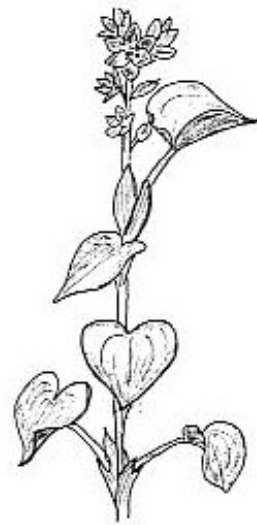
ミズアオイは、普通種コナギに比べるとずっと数が少なく、山口県レッドデータブックでは絶滅危惧ⅠA類に指定されるほど希少になってしまった植物です。コナギとの区別点は、ミズアオイは葉がハート型であること（コナギは広披針形）、花が葉よりも高い位置に付く（コナギは葉柄の基部に短い花序を着ける）ことです。ミズアオイの花には、6枚の花びら、6本のおしべがあります。その6本のおしべ

のうち、黄色い色をして目立つ5本はなんとダミーで花粉を出しません。目立たない青紫色のおしべ1本のみが花粉を出します。ミズアオイには、花の右側にこの青紫色の葯を持ったおしべ、左側にめしべを持った花と、その反対に左側に青紫色のおしべ、右側にめしべを持った花とがあります。これは、虫が異なる花の間で花粉をやりとりできるように工夫されているためだと考えられています。

大昔の人はこのコナギとミズアオイを区別せず水葱（なぎ）と呼んで、夏の野菜として食べていたそうです。奈良時代以前から平安時代にかけて全国的に広く栽培され、主に羹（あつもの・具の多い汁物）にして食べたようです。夏の数少ない菜として、乾かして貯蔵野菜にもしました。万葉集には水葱を詠む歌がいくつもありますし、宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）では、清徳という僧が三町歩もある田のミズアオイを全部食べてしまう物語があります。鎌倉時代から次第に栽培が減りましたが、江戸時代まで栽培は続きました。今ではすっかり厄介ものですが、いろいろ知恵をめぐらせば利用の方法が開けるかもしれません。



コナギ（ミズアオイ科）



ミズアオイ（ミズアオイ科）

4. ビオトープ関連（会員の声）（原田蘭子 記）

嫁いで40年、田舎の山の中、右を見ても左を見ても山、田んぼはその間にあります。初めはカラスが頭の上で、アホーアホーと鳴いているように聞こえます。カラスに笑われている様子、くやしくてくやしくて涙が出そうです。いつかカラスに笑われない様にと、あの手、この手といろいろ知恵を使うが中々いい考えが浮かばないまま月日がたちました。

芋を掘れば空からそっと見えています。一寸隙を見せると傷のついていない芋を銜えていきます。

トマト、イチゴが赤く色づけば、それを狙います。網をかけると上から眺めています。それどころか芋が掘れるようになれば今度は猪、筍が出れば、栗が落ち始めれば、猪。これは電熱線を張り目眩かし、どうにか防いでいます。雨が降らなければどうにもなりません。ビオトープに行ってみれば水車は回っていません、空を見上げて、見上げて、水田も枯れ始めたころ大雨が降り田畑も息を吹き返し水車も回り始め一安心！

次回は 西村靖子 会員にリレーします。宜しく

5. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

- 7月15日 今日は犬のハッピー君と3人で散歩に来ました。とてもハッスルして走り回っていました。
またつれて来たい所ですね。 徳山市 H・T、 A・T、 K・Y

6. 会よりの連絡事項

- 1) 例年のごとく今年もそばの種をまきます。出来は天候次第、みんなで頑張っても、収穫が無くても、種を撒かないと実がなりません。サマージャンボの3億円も宝くじを買わないとあたりません。8月20日に行ないます。

7. 編集後記

梅雨も明け、いよいよ夏本番となります。今年の梅雨は、7月に十分雨がりましたが6月はさっぱりでした。暑い夏を乗り切るだけの水が蓄えられているか、少し心配です。しかし、当地において災害が無かった事を考えると、まずまずの梅雨といえるでしょう。

さて、夏になると稲をはじめとする作物もどんどん生長しますが、人間にとって有難くない雑草も同様に成長します。我々の理想とする無農薬での栽培は、本当に手がかかります。田の草取りにしても、数人の手作業では埒があきません。しかし、数十人が一斉に田に入れば、たちまち作業が終了します。草原、湿地帯の草取りも同様です。除草剤を使わないようにするためには、人手が必要なのです。

次回の参集日は炎天下での作業となるでしょうが、いい汗を思いきり流してみてもどうでしょうか。収穫は、去年のように自然の力で台無しになることもあります。しかし、努力無しには収穫の喜びもありません。

(前田 歳朗 記)